

自閉症児1例における語彙力の縦断的検討

新潟医療福祉大学言語聴覚学科・吉岡 豊

【背景】

自閉症に代表される広汎性発達障害児の多くは、ことばに遅れを有することが多い。この傾向は標準化された言語検査でも認められ、生活年齢よりも語彙年齢は低くなる¹⁾。また、広汎性発達障害児では理解語彙年齢が表出語彙年齢よりも低くなる傾向があることも報告されている¹⁾。また、定型発達児と比較して表出語彙数も少ない傾向にある²⁾。これまでの研究は数多くの症例を1時点で調査したものが多く、黒田ら(1993)は小学校就学期間中の言語発達を検討しているが、用いた評価尺度はK式発達検査であり、言語面に特化したものではない。本研究では、言語の語彙面に焦点をあて、広汎性発達障害児がどのような言語発達経過をたどっていくのかを縦断的に検討した。

【方法】

対象は4歳4か月時に地元の発達相談にて自閉症と診断された男児であった。妊娠中に特記事項はなかったが、出産時は吸引分娩、出生時体重は2,882gであった。発達歴は定額が3か月、始歩は12か月頃であったが、初語は1歳6か月頃(「ブー」：乗り物)であった。1歳半健診にて保健師より言葉の遅れと視線が合わないことを指摘された。2歳になってからは月に1回の頻度で地元の発達相談へ通い、3歳10か月より地元の通園施設へ毎日通うことになった。

言葉の訓練を希望して新潟医療福祉大学言語発達支援センターにきた4歳4か月時に実施した遠城寺式乳幼児分析的発達検査では、移動運動が3歳6か月レベル、手の運動が3歳2か月レベル、基本的習慣が3歳6か月レベル、対人関係は2歳1.5か月レベル、発語が1歳7.5か月レベル、言語理解が1歳7.5か月レベルと対人関係と言語面(発語、言語理解)の遅れが著明であった。言語面(語彙力)の検査では、絵画語い発達検査は理解語彙年齢が3歳0か月未満、田研式言語発達検査のI. 語彙検査(4歳7か月時に実施)による表出語彙年齢も3歳0か月未満であった。非言語性知能(大脇式知能検査)検査では精神年齢が4歳0か月、PIQは91とほぼ年齢相応であった。本症例に対して定期的に絵画語い発達検査(理解語彙年齢)、田研式言語発達検査(表出語彙年齢)、表出語彙数を評価した。

【結果】

生活年齢と理解語彙年齢、表出語彙年齢の関係を図1に示した。この図から語彙年齢は生活年齢よりも一貫して低く、かつ理解語彙年齢は表出語彙年齢よりも低い傾向にあることがわかる。

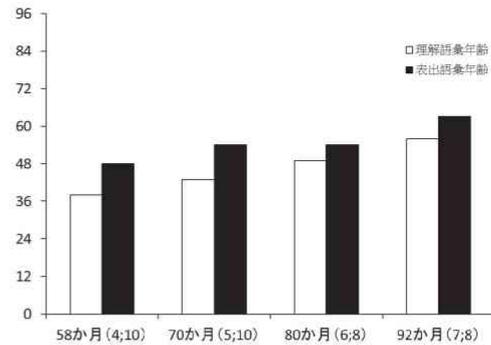


図1. 生活年齢に伴う語彙年齢の変化

表1には表出語彙数と品詞割合の変化を示した。この表から、表出語彙数は増加傾向にあるものの6歳を過ぎてもその数は少ないことがわかる。また、初期には名詞の割合が高く、その後は動詞の割合が増加傾向にあった。

表1. 表出語彙数と品詞割合の変化

生活年齢(歳;月)	表出語彙数	名詞率	動詞率
4;9(57か月)	267語	85.4%	4.1%
5;0(60か月)	536語	76.3%	10.4%
5;10(70か月)	1063語	70.0%	14.6%
6;8(80か月)	1506語	68.5%	15.9%

【考察】

本研究の結果、縦断的研究でも理解語彙年齢は表出語彙年齢よりも低いままであった。このことから、自閉症児において理解語彙能力が低い傾向は一時的なものではなく、自閉症児の特徴である可能性が示唆される。また、表出語彙数は増加傾向にあったが、初期では名詞の比率が高かった。この結果は、西村⁴⁾と一致していた。名詞の比率が高かった理由の1つとしてはエコラリアの影響が考えられる。

【結論】

自閉症児1例の語彙力を縦断的に検討した。その結果、理解語彙年齢が表出語彙年齢よりも低い傾向にあった。表出語彙においては名詞の割合が高かったが、それにはエコラリアが関係していると思われた。

【文献】

- 1) 吉岡豊:言語発達障害児における語彙力の検討. 日本発達障害支援システム学会 13:13-19, 2014.
- 2) 吉岡豊. 言語発達障害児における表出語彙の特徴. 新潟医療福祉学会誌 13:53, 2013.
- 3) 黒田吉孝, 井上悦子, 荒川順子:養護学校就学時点において1語発話レベルにある自閉症児の言語機能と認知機能の発達と障害の縦断研究. 季刊障害者問題研究 72:368-376, 1993.
- 4) 西村章次:自閉症とコミュニケーション. ミネルヴァ, 2004.